御帳のうしろより手觀音不動明王
丈像いまもて何を戒筆上人感得
之尊靈驗異他　後花園院御宇
文安の沽晴明末孫安倍有清朝臣當
堂不動像之事先祖持尊也猶晴
明　天文博士大膳大夫蘇生後保八十五歳云
逝去之時閻魔王宮へ
召しく命ぜられ蘇生あ

星霜名尊也 綸命可被返社子孫之由
被申にしたがひて如法被仰出之
勅定之上者不能子細以吉日参向述懐
来即来唐櫃より奉納之 使使節与
住持 忠淳僧都相尋 社家先
祝 禁中可参内様之由 被仰出
よ条 即参内 切て見給ふ 明

王 [illegible] 如何 [illegible] 被為仰 [illegible] 使
更ふ不存知之 宣旨之 但はしの重
くあり [illegible] 賀茂川 [illegible] 俄よかろく
成 [illegible] 不審 [illegible] 各 [illegible] 叡聞の
[illegible] 寺家へ為 [illegible]
別子細 [illegible] 参内 [illegible]
可 [illegible] 由 [illegible] 出 [illegible]

ましませり此間は如来と同く東
向に坐し給ふいまは如来の右方
に北方へ向て坐し給ふ剱をは御
膝に横へおかり不思議の由縁を之
尋るに叡感不浅佛意に感應ありて
かうしこの上ある次第殊多くて止
訴訟の由被仰下ぬ是則如来と一致

なりしそのりて慈悲の誓ふかき
衆生を加護し給ひ魔難を除く
現当の勝利を得せしむとの誓
約なるへし剱は利剱即是弥陀号一
聲稱念罪皆除弥陀乃威力を加
給ふ事甚深也殊妙也とましまして
此の蓮花童子の當山の護法と

所を事此明王代後者相書也
くを後より劔を南手より手合特色
も又南膝小あらず子孫あるにやと予
今去まり置之能中手手ハ他教大師
し御作子掌子眼備ハ在之仍毎
年晩西に初夜道導師し時に御悔過用
之後夜師し時子手悔過用之

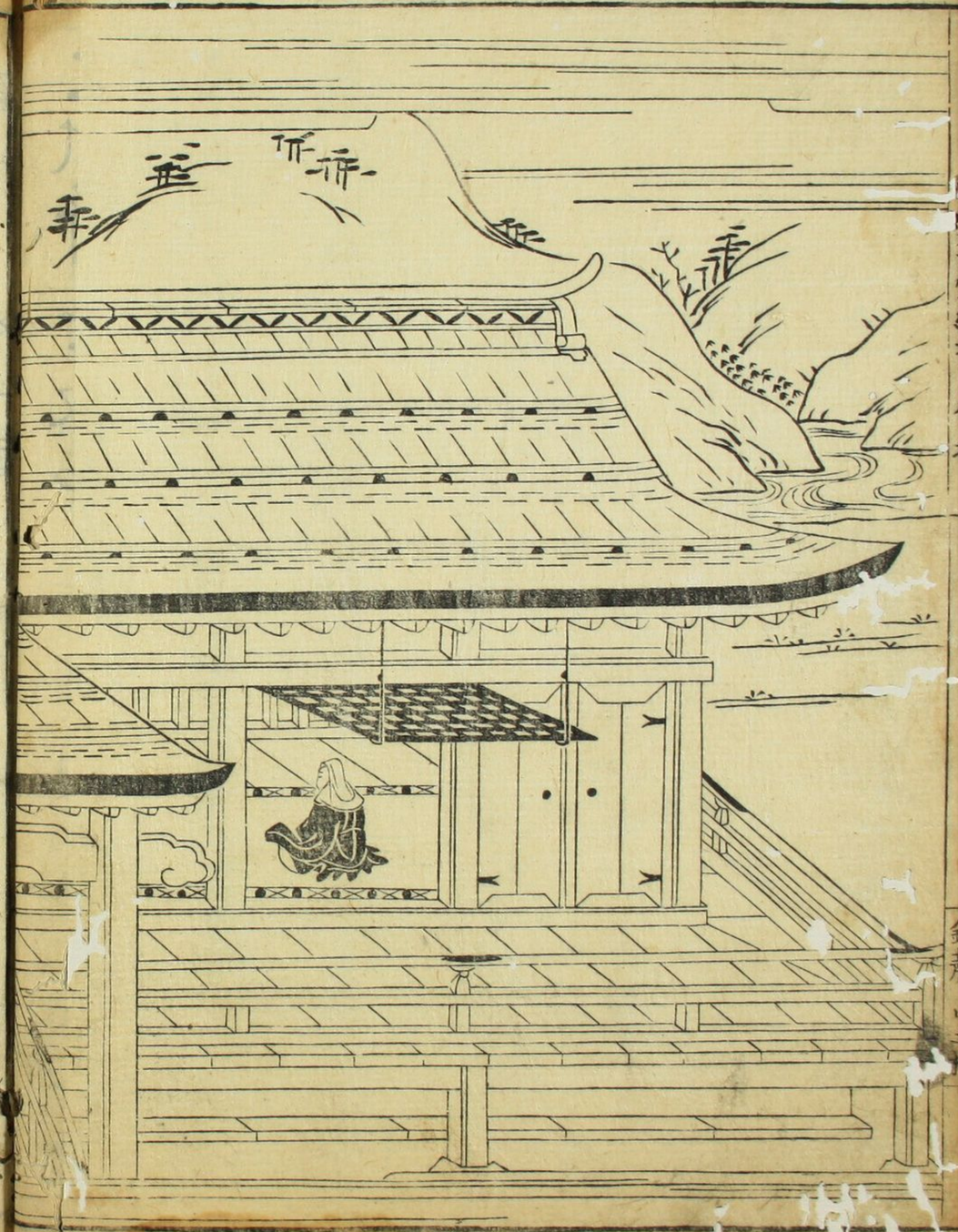
霊鷲山之図

應仁乃はしめ頃田中の里
に高き尾あり日參し久敷も
念佛中事ハなくて心經をしゝ
ゝとなみ井くゝ佛を作る時礼
堂佛おに移り奇なる内陣より
時なく益なき法をとゝよ医
五切思惟し奇なる物なく

こゝ奇をれ衣えていは連も心
もとゝすしゝ中屋ふ来りく
易けり間とゝくはゝ中
来りを見れを
見ゝ

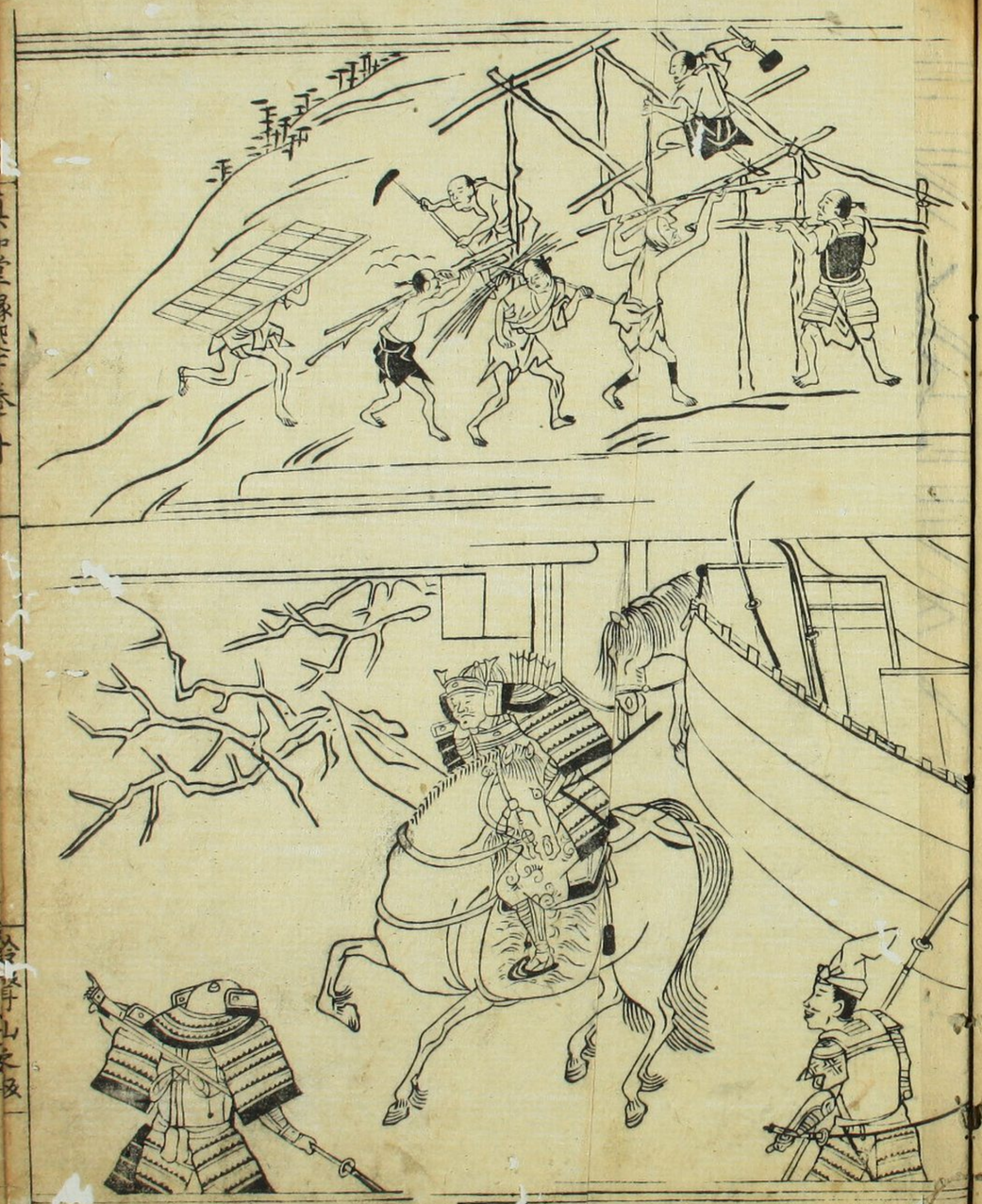
念佛中ゝく
往生素懷遂事

去應仁乃大乱ふり同二年戊子孫八
月三日如来を黒谷青龍寺へ奉
移之其勝東岩倉合戰狼煙
とうてあるを覩彼風り
ひらまてはたし
そうし



金龍山之板

さるほとに東西国諸軍勢の中
に乱入諸堂坊舎等陣屋となるため
に破壊ししかうして皆荒野と成
し也其後本尊坂本へ下申たま
由衆僧内談ありしたまふし究竟下
同竹内と申す處に庵僧あまた我
は洛陽東山鳥辺のあたり近須青
龍寺といふ寺に緇素利益のためかくれ
山にゐて安地しけるか我がある
へは他の論しとおぼえて夢にあらぬい
かやうなる事にこそと思ひて黒谷へ乃
ぼりて伺ひける程に此如来坂なり
てもいはく下しまつるへきと讃合
れなりしもとかくかれしいるめ鎮



かうこく屋そ敷地を奇進ゆき

このは宮ゐ一字を建立しく

文明二庚寅年三月十五日小宮ゐ真如

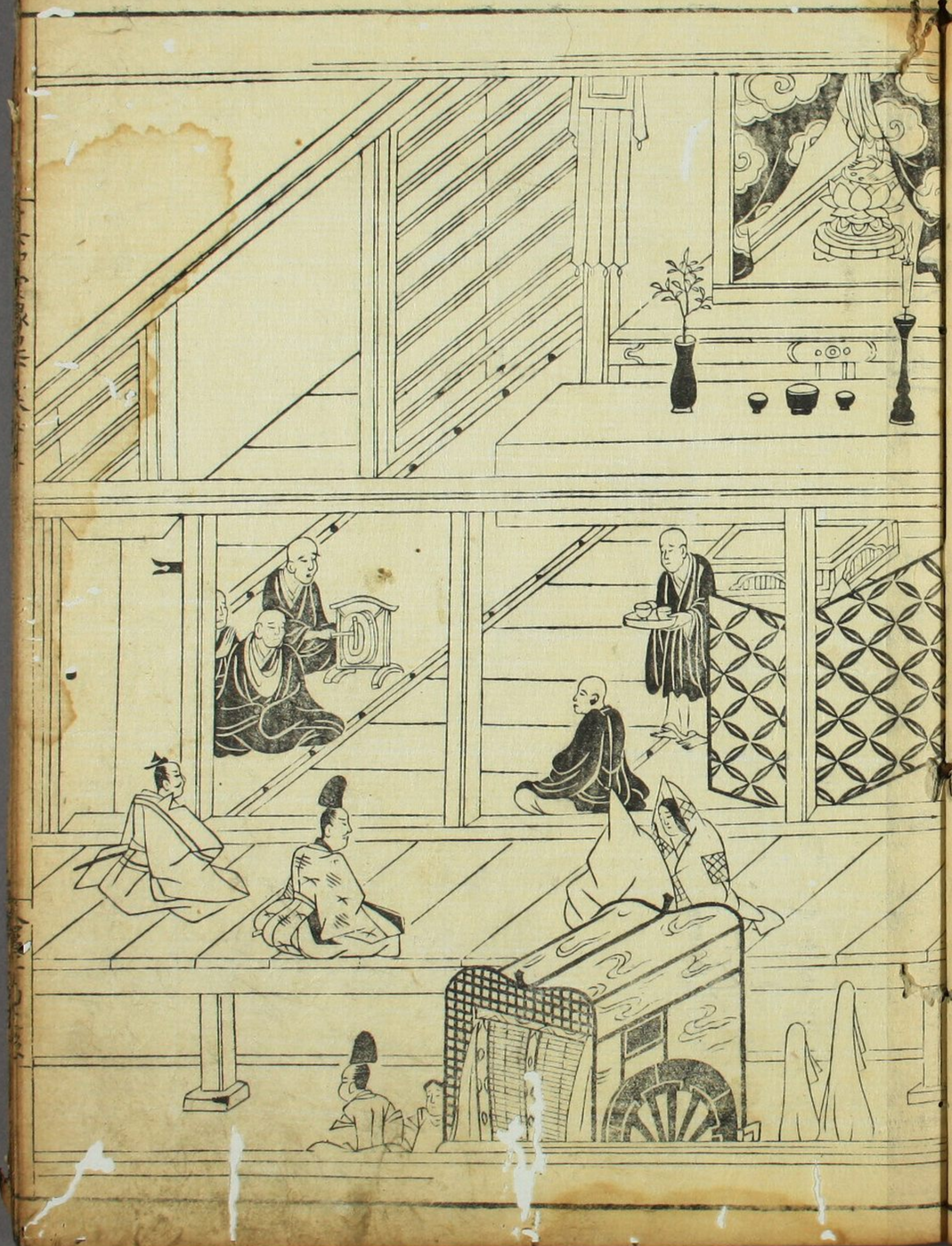
堂号寶光寺へ奉移ス

貴賤群集いまゝ今

不取本取者

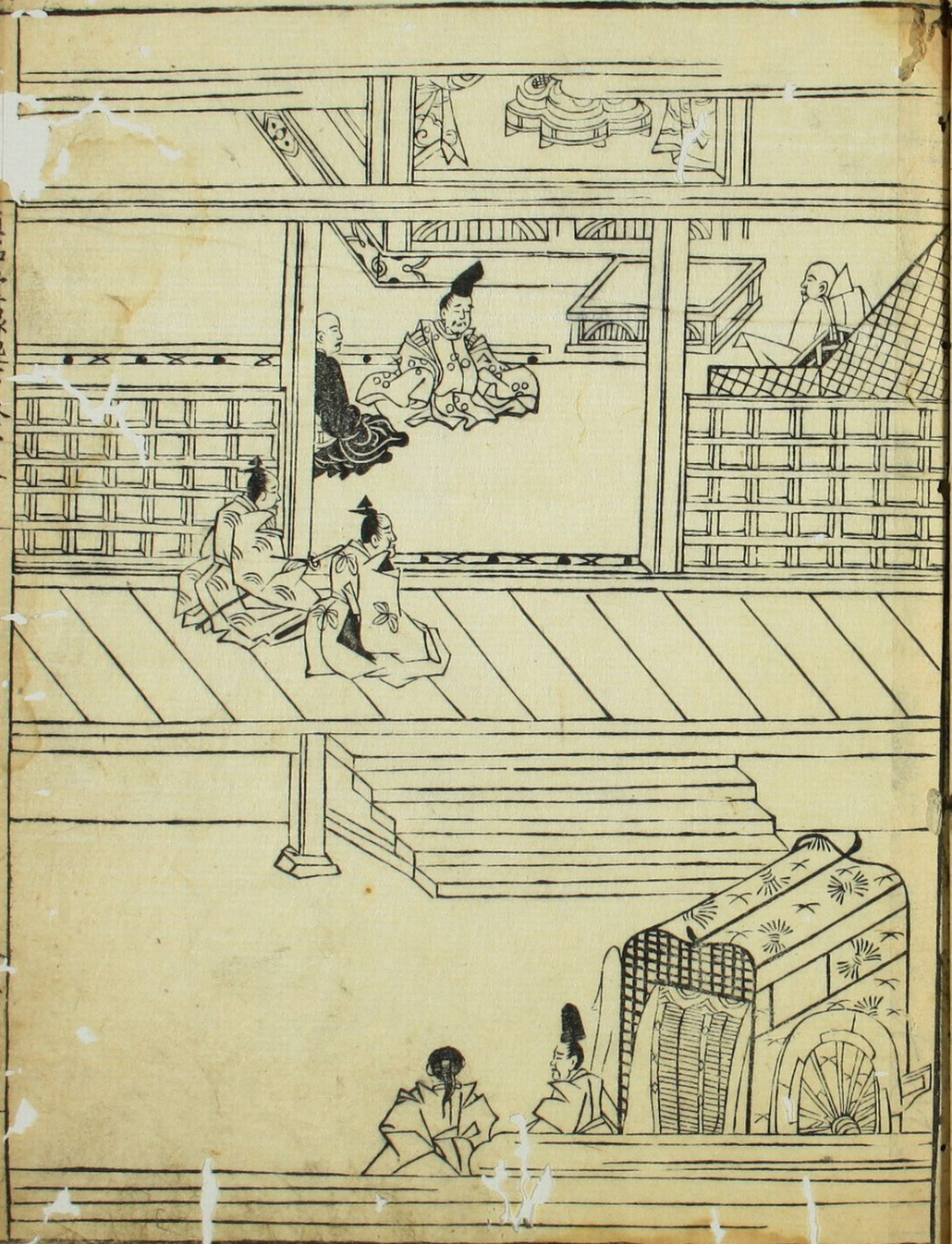
やり

真後天下靜謐し間文明九年
三月廿六日洛陽一條町へ遷し
寶光寺の地代尊安置し恵心御作 御臺所 妙善院殿 当寺
因依爲滅罪生善いのりのため 行礼堂
四十八日不斷念佛被修し文明十
二年二月十日始行同三月廿七日結
願し道俗群集の中より乞食者あ
り乞食者一七日出て星
居し其病をなおしてきたい移へ来
給則命終をもしむ事を祈申ける七
日満する暁僧形の素く小刀ゆて足
乃筋をきり切る日なれし爰う
地ゝをみ小膝の下血ある通ゝ星
夜あ家ゝ純し足して歩ゝなる



うう不思議なる花市道と常式人の
ちうくをあうさりたる　四十八日
念佛の勧るまは参詣の衆各お
ゝ誘きあくく伝教を信ぜ
いぬ事なるに

慈照院殿東山より御座時引移る
當寺御歸依為大施主當堂可
被造之由被仰之文明十六甲辰季
六月一日自一条町東山へ舊跡へ還
座畢先殿同十一日常燈二器金燈呂内陣釣之
為不退之勅願寺亀毛燈花園田
之内御寄附之同十七年三月二



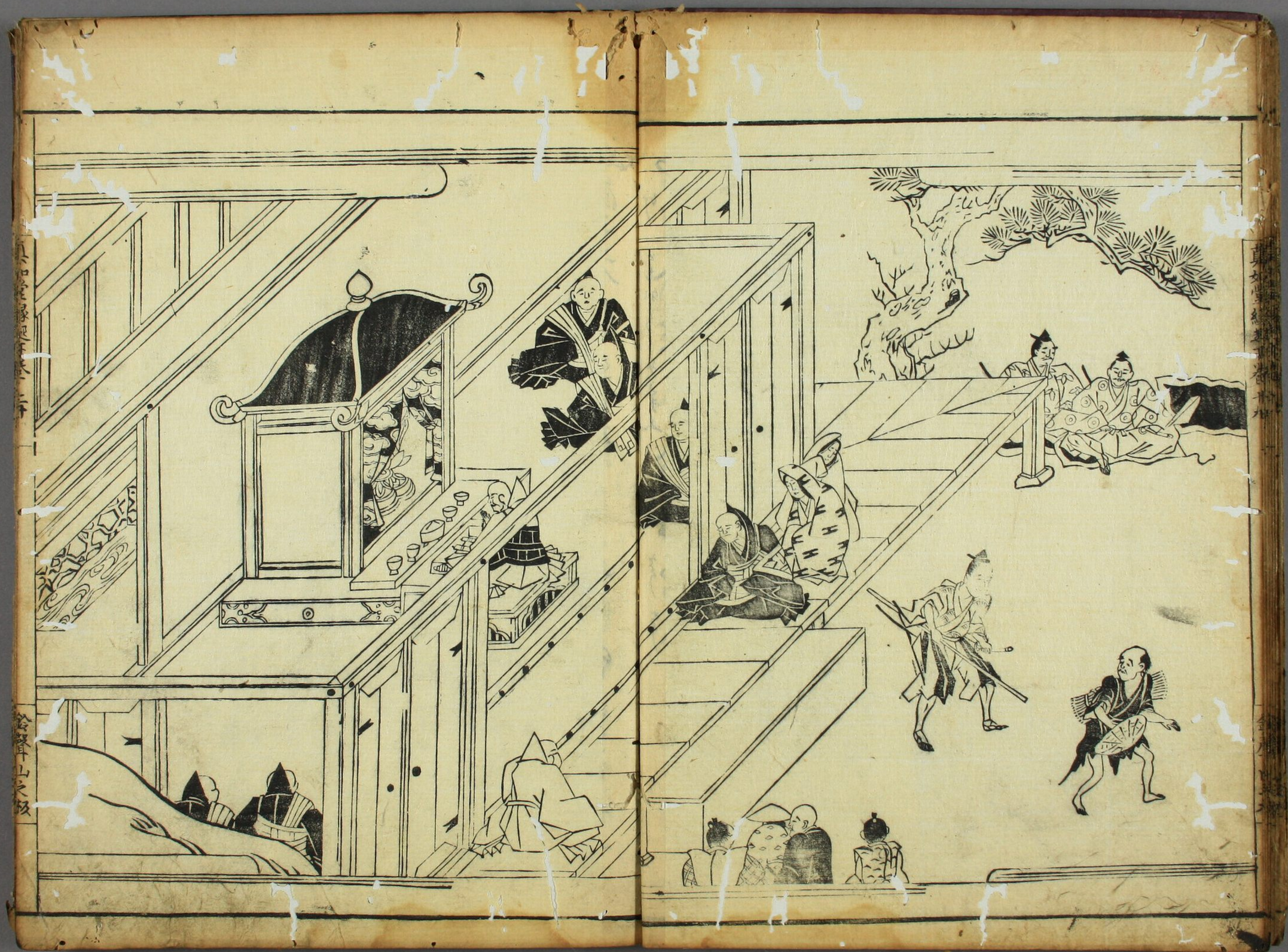
日本堂立花平事後細く御系譜
御逆修ひろく七日くよあり
百日御系堂御雛鳥
あらうさうさわ

同比真盛上人群生化導のそなへ
に法筵青蓮院門跡生母蓮門院
光譽僕從小席若とゆける者如来を
みたてまつる上人懺悔し給
儀をうけて高帳を開て乃勢し
給ひ是を不奉拜之者をしれ
らに扇敬あけ給をくみえ給

よしも尊躰はみえ給とそのち
光響法事也弘願石奥まて番鬼
きて法者申奉よそ乃佛を
はいたもも皆拝見すむ當堂
乃如来我よ系れ給事更て
多新しうぬよ申て一七日系
勝れ中に門前なる白河流れ
く魚を漁りとるそ白きあり
逆孫とて成やもむ順縁ハ
おろひ多えり後事ハ
いまし絶乃をめり
是を書注く

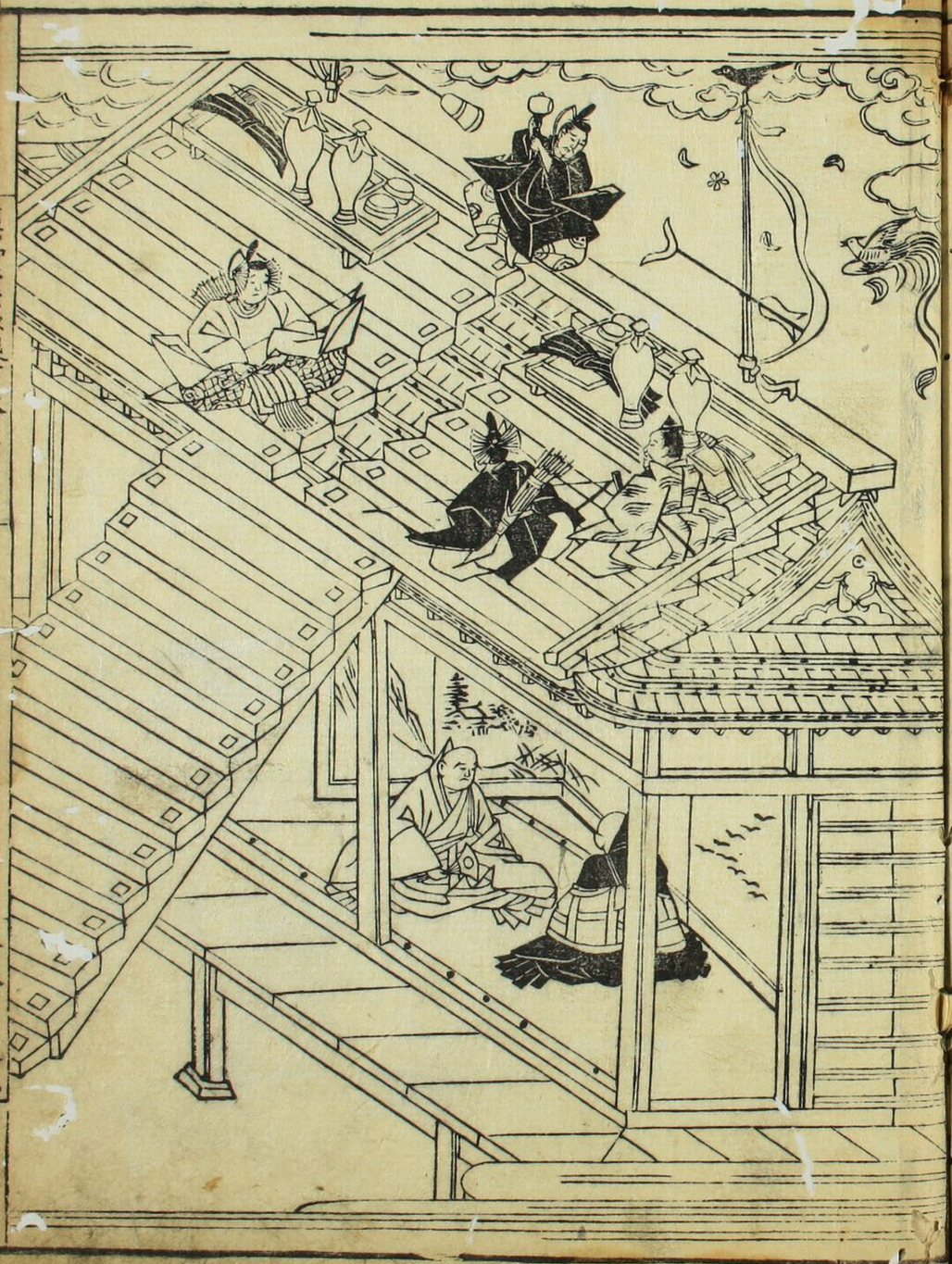
真如堂縁起下巻十八
金剛山之板

大僧都遷座之事 本堂いまのたてはた
なりはいとも住持長淳二位法
之芳躰なるに間一日あんをきたく
存企て
明應二癸丑 八月七日遷座之事
御道師寺務 青蓮院准三宮前
天台座主令勤修之 給僧綱有職
以下令律之給元僧正
供奉之衆列事
載別記之間
省略之畏


眞如堂縁起繪巻 二
鈴聲山之板

當堂修造之事　慈照院殿御願
さりとい面ともしるく雲之道
まゝ〻ちのは　尊　御法華あ
まねくいふを成風たちをのの
ゝ歳よりて文亀三　癸亥　年三月
二日より　尊　開帳　願　阿弥勸
進聖者　騰蓮社　玉翁　毎日講　阿弥陀
経同廿九日結願之當時浄土宗碩学
ゝ道俗帰依　妻　他ゝ故寸金尺
末ゝ懇志　貴　日数なるよし
あつまるゝまゝ
造功之事

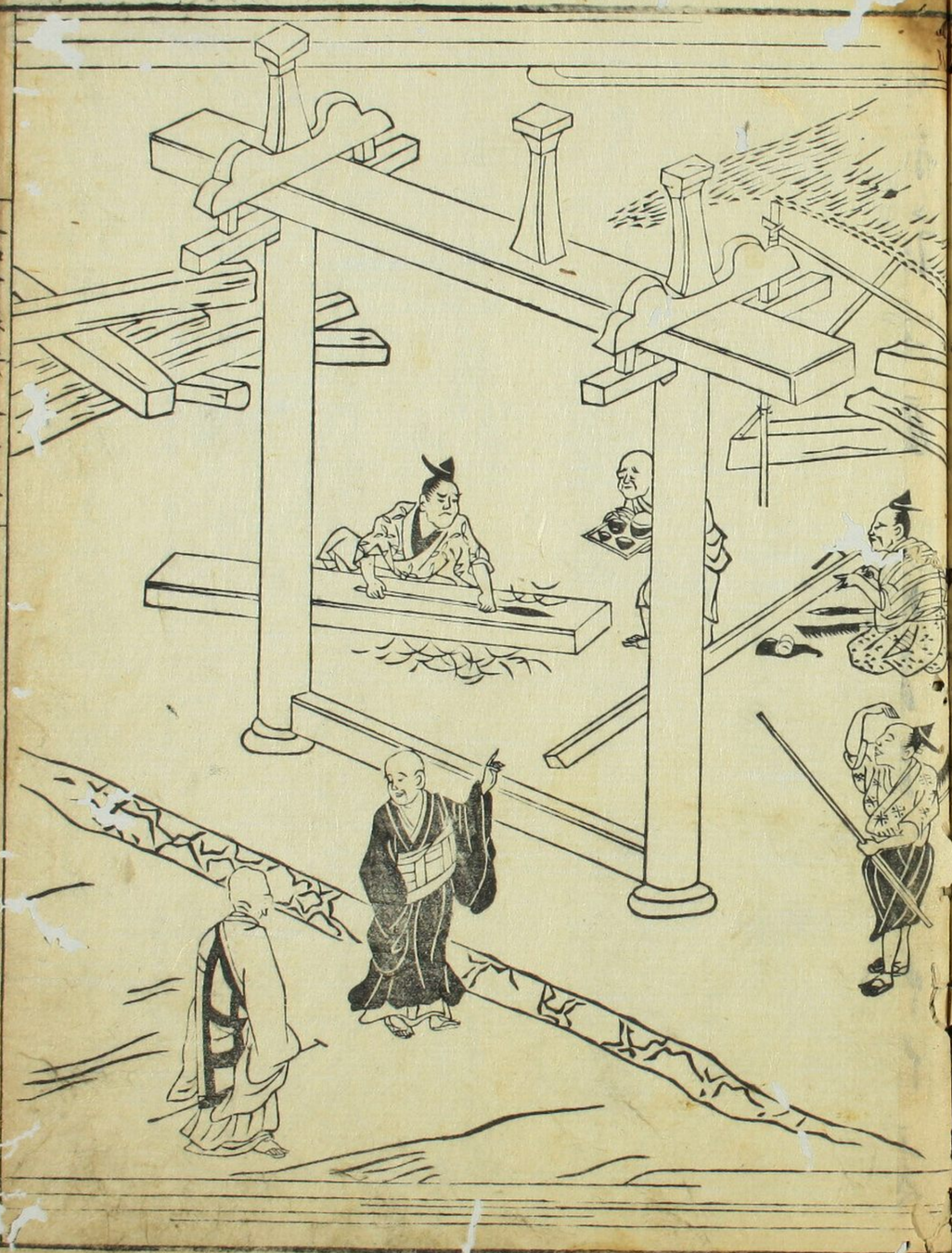
同四月七日本堂上棟より時紫雲堂
上より遍覆し天花虚空より乱墜
して曼陀羅華降くして待る華も
枯くきらめきしる花ちらく散く
たれる雨ふ諸人手ふらしむとる
ちをうへて空より消ける也嘉永禮く
奇妙雑色く島さらに華とみゆ棟



よたてるゆみ上よりかゝりて花まて
夜右よりかゝり上棟祝儀滑稽ぬ
きい天華をみんとて鳥
鶴を化物も雲りゝ
ゆ沈て同く西乃
空よ去ぬ

あらいのうく
其日成刻
西ハ[illegible]ぬ
同帳年

本堂造畢殊ら奇瑞来代といへも
あらうるあわけ[illegible]慈母門鄰た
ちつなる御特に淀代女院の皇宮
を引うけさせ[illegible]時[illegible]四足門
也是者寺家[illegible]英同ある[illegible]八幡先達
玉翁上人を招請て永正二丑年三
月二日又開帳法読同四月十日立



極同廿四日

上棟

同日閑帳

ゆ形寺門

造立畢

造畢本堂供養乃儀則難

事行して経数年蹤を美作国大
業郡真鴻庄住人を念佛行者あ
り善阿弥と号す故に里一夏し
間當寺に參籠の志あるより熟
望して数旬住居さむ仍住持昭
淳律師此堂供養の事歎入の
由相談の處に成不易事但佛意
て可思給由同心の象永正十六
己卯年五月十七日為勸進先防列へ
令下向了在國淳亘年月更無長
便に間同國赤崎辯才天へ可祈精
の志ありて同十八年正月一日より於
彼天女寶前に菜菜食して
此事不成就者命終せしめ給へと一

心より祈念して御此赤崎明神と申奉
勇列巖嶋明神と申奉勢子小勢
よりつきて赤崎へ影向し給ふ地
い地藏藥師釋迦と申す地藏菩
濁世の導師藥師如来は晝夜乃擁
護釋迦は以法華經為身祈と秘
記より裁きり元辯天八帯沙佛乃
所とにして福天となり併如意
珠の形より出るる也世流布仏多い如
意輪觀音乃垂迹也然より如此諸尊
小りる事者にて如意珠八心法乃
当体なる也萬法より色んを
真即是俗と乃是真如と意珠文
巖嶋八胎藏毗盧遮那の意也と

へ至いけまにしたりくをんおもいをれし
珍よ法花の論い龍女成佛是則辯
才天也又孫陁法花ハ一佛乗異名惠
心院先德廣念佛を唱ん以て法
華経讀誦しに小法華経讀んと
てハ六字名号を誦せ彩昔在靈
山名法花今在西方名孫陁ちなて

往感應道をそ受へりとまたそく
ゆ一七ヶ日參籠結願しに後
如形勸進をなして同五月下旬國を
しち六月十一日ふ歸洛も但猶供養
嚴重之儀式遂ずくして京都鄙ハ貴
賤を沒くめ且ち四衆有情結緣の
をめ且ハ十方檀度開舍ハさめふ

同八月十五日　時正開日　於礼堂別時
念佛始行之　僧衆四十八人　如先規十箇日
之間執行之　同廿四日結願之事仍供
養當日八同廿九日也　御導師寺務
青蓮院宮入道親王以　綸旨為御
案内　右中將重親　御請文在之
辰下剋　御導師　御入寺如常　相調之
先法會以前舞樂人於礼堂乱舞
其後　勅使參向給　右中弁資宣　次舞
樂人　御導師　方丈ゟ南面堂之
砌於門下万歳樂　次於廷
上一曲ヲ奏シテ　次引列有職以下次
第侍者如例　次於佛前之庭上萬
歳樂の一曲在之　次法會はてまりて

散華大行道の樂人為先行其外僧
正法師僧都律師以下讃衆次後者次
第持燈奉記別在之間不及注之
之法會始行之時分ら瑞雲西
天ら星流出靉靆して堂上ふ覆へ
又三光澤ふ現して面々一二奇
瑞紛紜貴賤見聞掌をあ
ら世心我敬しく
作信を
持別記ら

此李尊日夜朝暮養育し掌に
稚児を置き給へ人に従ひ其数を
たゝ源或ハ乳母よりを相語て世務
するを有り或ハ恥思ていひおさ
ぬもあり先年裏盛上人あり乳
母て四陣の御帳を冪く多なり
て引入れらも孫よみてまたゝ
く只白壁のみにみるお族のまりに
事多けれはは駆記よ載るはる
にく今不注く絵巻ちをなき者
と思ふもよる稚児又ちをを
かゝへまゝゆる人の母をあり
清量宿縁ふる汉を思ふよ見
御漳ゆれま者ハ順次乃往生の

何疑平此外爰ハ告よりて兼知
死期ハ化ヨ即得往生の相ありと
業服今ヨ至ル
除限なしとふよりて
験記ヨ讓ル
功ヒ

詞

入道前内大臣
西三條實隆公法名
号逍遥院尭宣
法勢前大僧正公助
号定法寺青蓮院宮院室

轉法輪左府公敦公息

繪

掃部助久國

外題

宸筆

後柏原院

此繪二卷住持昭濃僧都命畫工
掃部助久國令圖之杉詞者古今
見聞之靈驗不粗抽詮要法務前
大僧正公助草之減量寺家來素
際之珍奇也道俗貴賤一見之驚
須爲滅罪生善往生極樂之良因
于時大永四歲次甲申年八月記之

遍照金剛入道親王尊鎮

右本尊模写
大沢論定

新刻真如堂阿彌陀佛像縁起跋

右本堂阿彌陀佛像縁起三巻珍藏久矣去歳本寺羅池奠殃堂宇盡燬而佛像縁起得免其禍寺衆共謀徧叩諸檀營建堂宇因令畫師友竹寫之能書人雲竹書之既成命諸梓工廣布四方庶幾使見

聞者起歡喜布施之心也聊紀年
時以跋簡尾其綴文書畫姓名各
具本卷今不復贅
元禄六年歳次癸酉十月真正極樂
寺第二十八世住持沙門尊通謹識